

第 2 回大台町地方創生会議

日時：平成 27 年 5 月 25 日（月）13:30～15:15

場所：大台町役場第 2 会議室

1 開会

2 副町長挨拶

こんにちは。2 回目ということでありがとうございます。今日は、前回よりもっとよく顔が見えるような形ですが……。西村先生もお忙しいところありがとうございます。4 月 27 日に第 1 回会議を開催し、2060 年の大台町の姿についてそれぞれの立場からご意見をいただきまして、本当にありがとうございます。そしてそのご意見を受けまして、町長をトップとして幹部職員で構成する推進本部を設置しており、そのメンバーでも議論しているところがございます。今日は、人口ビジョンの骨子素案と総合戦略の骨子素案を示させていただきたいと思っております。それに対していろいろなご意見をいただきながら、今後は具体的に細かく戦略としてうっていかねばいけません。総合戦略については町の職員によるワーキング部会をたちあげておりまして、今勉強中でございます。その部会の中でつくりあげているということです。大台町でも将来どうしたらいいのか、ということについてはすでに策定している総合計画に基づいて実施しているのですが、もう一度立ち止まって違う視点から、どのような施策があるのか、などを若い職員中心に検討することとしております。是非ともみなさまからいろいろなご意見をいただきながら、いい町をつくっていくための施策などについてご指導いただければと存じます。西村先生にご指導いただきながらやってきたいと思っております。本日はどうぞよろしく御願いたします。

3 事務局説明

企画課より資料説明

4 意見交換

西村座長

ここから、今ご説明のあった内容、総合的に書かれていますが、全部へのコメントは必要ないかと思えます。それぞれの委員のみなさんのお立場で得意とする分野の話でも結構ですし、それとは全く別にこの文言を見ながら考えたことでも結構ですので、自由討議のような形で皆さんからご意見をいただければと思います。

特に長期展望と 5 カ年の基本目標の整理がありますが、その各項目など、また長期展望

の項目について 2060 年の大台町の姿としてピンとくるのか、ということを含めて見ていただいていいかと思います。この町に住むこと自体が誇りに思えるということが、最終的にはそこに住む人たちの住み続けるモチベーションというか、推進力になると思います。その 40 年先の 2060 年に向けて今どういうことから始めればいいのか、というのが 5 年の基本目標になっているかと思います。それぞれの基本目標が資料の左側の長期展望に向かって 4 つのことを始めてみてはどうか、特に一番重要なこととしては、実は本日別の地方創生会議の中で話しをしたのですが、将来像を見据えて、住民としてこの町はどうなったらいいのだろう、ということを含めて共有する作業がかなり重要なことだと思っています。地ならしをせず、地盤をつくらないで家を建てるということではダメで、しっかりとした足場をつくった上で家を建てるとなると、この 5 年の間に、大台町に住む方々が、「大台町に住む誇りとはなんだ」「大台町はどういう町であるのがいいのか」ということを、できれば活発に議論してそれを最大限引き出すような形で皆さんのコンセンサス、共通意識、共通の将来像ができれば、上にかかげてある 3 つの施策を進める中で長期展望が出てくるものだと思います。こういった流れで総合戦略の骨子は立てられています。事前の打ち合わせでもそのように捉えました。となると、わたしは外から来ている人間、三重大学の人間で大台町の人間ではないので、大台町に住み関わっている皆様の声は意味があるものだと思います。是非ともそれぞれの立場から、特にこの長期展望と 5 年の基本目標の整理のところについて、もちろんこれ以外のところでもかまいませんので、自由にお一方ずつ感想でもいいですし、ご意見でもいいですし、施策を言っても構いません。では野田さんからお願いします。

野田委員

質問でもいいですか。今現在人口が 9950 人で、前の会議でも出ていたコンパクトシティを目指すのもいいのではないかと、人口減少は止められないので、ある程度、7000 人だったら 7000 人、6000 人だったら 6000 人というように、人口をここまでというように決めて、そこを目標にするまちづくりをしていったらどうかというご意見があったかと思いますが、自分も「そうなんだな」と勉強になったが、大台町がまちとしての機能を維持していくのに何人だったら維持できるのでしょうか。素人ながらも疑問で……。今わたしは下真手という地区に住んでいるのですが、おじいちゃんおばあちゃんも多くてお葬式も多いです。人も減っているなという感覚もあるのですが、ちっちゃいお子さんもまだいる地区なので、そこまで自分は不便に感じていない。今の下真手の人口は少ないのか、もっと増やさないかやいけないのか、あと何人減ればわたしたちは不便に感じるのか、が自分の中でイメージできない。9950 人ではだめなのかとか、7000 人くらいの目標にすべきなのかとか、それが自分では調べられないので。どこを目指すのか、が疑問で。

西村座長

鋭い質問ですね。立場によって違うと思う。役場の考えを代弁すれば、行政区画としてこの大台町を維持するためには、どのくらいの人口、それはたぶん地方交付税も含めて国からお金が下りてきて、なおかつ職員の方々へも給与を払いながら、住民へのサービスを今と同等くらいにできるくらいの規模となると、一番考えやすいのは現状維持か現状よりプラスですね。ただ今回は現状より下がっていくという予測の中で、少なくとも今ある行政サービスを削りながらいかなければいけないということを役場が真正面からはじめて考えるようになるかもしれない。それを何人だったらよいか、ということは難しいと思う。わたしのような中立的な立場から申し上げますと、ひとつは、このまち・ひと・しごと創生会議ですかね、順番が違うのではないかと考えておまして、これだとまず「まち」があるから、そのまちを維持するために「ひと」がいて「しごと」がいるんだよ、というように見える。今の野田さんのご意見は、逆ですよ。人が住んでいるところで不便と思わない単位が、例えば人がそこに住み続けられるような仕事がそこにあって、その人達がある程度不自由に思わない単位が「まち」だとするのであれば、それが何人が適正というのは、自分たちが決めればいいのかではないかと思う。2060年の姿を考える場合、極端なことをいえば役場がなくてもいいかもしれない。そこに住む人たちが、どういう町ならいいだろうということを自分たちが想像できれば。事例を紹介すると、ヨーロッパがいいかどうかかわからないですが、極端な例を2つ申し上げますと、1つはフランス。フランスは、村という単位はかなりいい加減です。10何人の村があるというのを聞いたことがあります。それでも行政区画として認めてもらっている。ただし、その村が全部できるわけではない。大きな自治体に頼っている。〇〇家が村を守っているというのを聞いたことがある。よく似たような話がドイツにある。ドイツには800くらいの市がある。100万人以上の町は3つしかない。あとは10万人前後の市が、もっと小さいかもしれないが、それが均等に分散している。それらがネットワークのように道路や電車で繋ぎながら、それぞれが独立して生きている。それぞれの町がその特徴を発揮できるような単位で集まっているような気がする。ひとつの考えとしては、大台町が平成の合併で宮川村と合併してひとつの町をつくって、このコミュニティとして生きていくということが決められているわけですが、わたしはこの単位でもいいと思う。合併によって、それぞれの特徴をもった町や村が集まったので。この集まりがコミュニティとして存続しながら大台町という形としていったときに、自分たちとしてはどういう町であつたらいいのだろう……。10人くらいが住んでいる地域であれば、過疎といっても、土地が使い放題という面もある。ただし、コミュニティバスなどを活用して子ども達の通学、おじいちゃん達の交通として不便がないようなことをしてくれれば、そこに住むのにはなんの問題もない。そしてそれぞれの地域の集合が大台町という町になればよいのではないか。そして、それが適切な「町の人数」となってくるのではないか。そう考えると、町に求めるというのではなく、こうあつてほしいと主張するものではないか。わたしたちはこういう町であつてほしい、だから町にはこういうこ

とをしてほしい、という形で。以上はわたしの中立的な立場からの個人的な考えですが、町としても問題提起として考えていただくとして。

また、もっと極論をいうと、アメリカでおこっている事例として、市役所を廃止して、全部民業にする、というもの。市役所職員が10名以下でものすごいお金持ちの集団だから成り立つことですが、市役所職員に中途半端なことをしてもらうのであれば、ものすごいサービスをしてほしいということから、民間委託をして、集まった税金は10名くらいの会社のようなところで分配をしながら、ゴミの回収は毎日やってくれるとか、そのかわり税金はたくさん払うよ、というシステムで町を会社のように運営しているところもある。そう考えると、なにが正しい、というものはないです。

では、次遠藤さんお願いします。

遠藤委員

前回は農業の話をしたが、今小学生と保育園の子どもがいまして、小さい子を育てるには育てやすいが、中学高校大学になってくると、難しい地域ではないかと思っている。大台町としてどうかという話ではなくて、自分の家としてどうかと考えると、今宮川で保育園と小学校、中学校、一クラス10数人でずっとメンバーが一緒。ずっと同じメンバーというよさもあるが、閉鎖的になりがちだとか、他の人との接し方がわからなかったりとか、もうちょっと広い視野を持って欲しいと思うので、高校以上では一度どっか出て欲しいと思っている。前回の会議では、昴学園がもっとすごくなって県内各地から人が来て、大台町の魅力アップにもつながるという話をされてましたが、それもいいなと思った。ある時期人の出入りがあってもいいと思うが、戻ってくるとかよそから来てくれるとかしてくれるといいなと思う。ただ結局、帰ってこれない、Uターン者減少というのがここに載ってますが、受入の土壌がないとか雇用の確保ができないとか、ここが大きいのかなと思う。前にニュースで見たのですが、会社の本社を地方に持って行くということで、東京に集中しないですむとか、地方で人が生きていけるというか定着するのにいいのではないか、というのを見まして、すごくいいなと思った。一度出て行って学校とかにいたりして、専門の知識とかがあれば、それを活かした仕事につきたいというのは誰もが思うことで、そういうことが活かせるような職場というのがあればいいなと思いました。

西村座長

そういう意見は多いと思う。特にこの環境の中で子育てをしたいということもあり、そのことによる逆のハンディキャップのようなこともある、人との交流の少なさもある。朝のテレビ小説「まれ」でも、高校までずっと同じメンバーでというのはある。それも魅力ではあるのだけれど、小さいうちからいろいろな刺激もあって、それは子ども達が選べばよいのであって。高校生くらいまで外の世界を全く知らずここで自由に生きてきた子ども達がそのあと花開いていくことが本当にあるのかどうか。自分の経験から言わせて貰うと、

南伊勢町の出身で、両親が酪農家をしていたので、まったく外に旅行にも連れて行って貰えず、中学 3 年生まで完全に隔離状態で南伊勢にいました。そのあと外へ出て行って自分の力でやって今に至る、というわけです。その経験からいうと、昔はそれのほうがよかったかなと思います。というのは基礎力をつけるというのに、徹底的にこの自然の中に生きたというのは、自分の力で生きるということに対してかなり、親なんか見ててそうですね、みんな自分の力で生きている人たちの集合体なので、それが当たり前とっていたので、サラリーマン世帯で育ったらそんなことはなかったもので、基礎力はできたのかなと思っている。ただしハンディキャップもかなり感じた。都会の常識はないし、習い事もしたことがないし。全部をつめこむことがいいのかは別にしても、選択させる機会とか、今はグローバルにつながっている時代なので、どんなに隠しても子ども達にもわかってしまう世界なので、だったら中途半端に気づかせるよりリアルなものを小さいうちに見せてしまうこともいいのではないかな。そうすると、今の話のなかで外の人たちが来て、例えばここで本物の人たちが働く場があって、そういう人たちと子ども達が接する場があれば、小さな集団で育つというハンディを回避できるかもしれない。重ねて言ってしまうと、この地域に軸となる産業があると、そこにプロの集団がいて、世界へ向かって働くような場がこの地域の中にあるというのは、ひとつの魅力になるかもしれません。今お話しのあった母親としての子どもに対する危惧というか、子ども達がハンディを負わないようにしようという危惧に対しては、町の中に世界の縮図のようなものができれば、ここにいて子育てをしてもなんのハンディもなくなると思います。もう一つは子ども達どうしの交流ですよ。人数が少ないから、10 人くらいの集団でずっと中学まで行くのがいいのかなどうか。これは逆を言うと、都会でも同じ現象がおこっていて、集団は 200 人とか 300 人とか大きくなるけれども、その場所だけで育っていく子ども達は本当にいいのか、も考えなければいけない。別のところで言ったことがあるのですが、なぜ小学校は 1 年間同じところに通わなければいけないのか。例えば、これだけ空き教室があって、これだけ近い距離ならば、極端な話、夏の 1 ヶ月間だけ一クラスだけ、津の〇〇小学校の一クラスごと移ってきてもいいのではないかなと思っている。職業高校でこういう話をして、生徒が建物の中にとずっと押し込められて木工とかやっているのだったら、1 ヶ月とか昴学園とかに入り込んできて、本物の森林で生きている人たちとリアルタイムに話しをしながら、例えばインターンシップをしながら授業が受けれるようなことがあってもいいのではないかな。学校が固定の場所に通うという考えではなく、1 年の間に 2~3 カ所移動することがあるかもしれない。そんなことができれば、ここの子ども達が 1 年のうち 2 ヶ月は津の小学校に通えることになるかもしれない。物理的にどうやって通うかは別だが。やる気になれば、昔のように人口の多いときにはできなかったことが今はできるかもしれない。どういう子ども達をここで育てるのか、ということのみなさんの中である面期待とか理想があれば、ここにいながらもグローバルな考えを持ち、多方面の人と交流が持て、子どもとして経験しておいたほうがよい基礎的なことをここではすべて経験できる町をどうやって作って貰うのか。方法はいくら

でもある。昔の概念にとらわれているとできないかもしれないが、今のようにインフラが便利になってきて、人が減ってきたというように環境ががらっと変わってきたときならば考えられるかもしれない。ここに住むにあたって子ども達の教育で一番困っていること気になっていることをはきだせばよいのではないか。その解決方法はみなで考えればいいじゃないかということ。ワーキング部会で考えることになると思う。5年で実現できるかどうかは別にしても、そういうきっかけがほしい。戻ってくる場所がないというのは、またのちほど企業の方々からご意見があるかと思いますが、この町に軸となる産業が必要ということではある。

次、小野さんお願いいたします。

小野委員

前回の会議では、自分たちの地域に誇りやプライドを持つことがいかに大事かがわかった。人口が減ったとしても満足して暮らしているのであれば、それはそれで幸せだったらよいと思ったのだが、現実を考えると人口は減るというのは、さっきも野田さんのお話しにあったが、やっぱり困る。現状維持か減るのを減らすことが大事。人口を減らさないようにするためには、大台町自体がお年寄りが多いまちで、その方々が亡くなって子どもが生まれる数は少なければ減っていくのはわかるし、何十年後はどうなるかは計算もできるのだろうが、それを食い止めるためには、やはり現役世代というか、子育て世代やこれから結婚する世代に町へ来てもらう、IターンでもUターンでも、人口を増やすという点からだけ考えたら、減らすことを食い止められるのではないか。子育て支援を充実させることとか。自分の夫にしても松阪で働いているのだが、毎日6時すぎには家を出て、帰りもそれだけ遅くなる。そういう時間的なことを考えると、この町に働く場があって、とうことが大事なのではないか。具体的にどうしたらよいかはわからないが、子育てでも、松阪の子どもは自転車を通えるが、ここの子どもは汽車賃もかかる、など時間的にも金銭的にも負担が大きくなるというのが現実である。UターンやIターンをしてもらおうと思うと、ここは住みやすいところですよ、魅力がありますということ、町民も町もアピールすることが大事だと思うし、子育てもしやすいということを発信していくことは大事ではないか。全国的に人が減って、自分の町へ自分の町へとやっていると思うが、ここへ来てもらおうとするためには本腰を入れて発信して、他の町と同じことをしているのでは、人口は増えないと思うし、UターンやIターンも難しいのではないか。

テレビで見たのだが、会社に行かなくても家で仕事ができるようなことも聞いたので、そういう人であれば、都市から遠くても自宅で仕事ができるのではないか。

西村座長

大変貴重な意見と思う。人口が減るのは仕方が無いと言ったが、人が生まれてこない、とは言っていない。次の世代がある一定数は生まれてきて、町がつながっていく、再生産

し続けるまちなしなればいけない。前回の会議では落ちていたが、岡本さんに追加していただいたのですが、女性を大切に、そのことで人口が再生産される、ということは重要である。それを実現するためには現実的な課題もあって、通勤通学には時間とお金がかかるということ。もしかしたら、ここに住み続けたいけどこのことで住み続けられない原因となっているかもしれない。だとするならば、その解決は本気で取り組んで欲しい、という意見が抽出されてくると、みんなが税金の使い方に対して納得してコンセンサスがとれる。2060年にこうしたい、こうありたいということはなにかというと、本当はみんななんでもしてほしいと思っているが、そんなことは実現できない。でもある一点を集中してやっていけば、それをきっかけにして町全体がその方向に行くということもある。そういう集中力というか、どういう町にしていくというのを、みんなが決めれば、例えば、企業誘致をする場合に、本社以外はだめ、100名規模の中小企業を東京から引きはがしてくると。これだけにがんばってくれと。そうすると、町としての政策は打ちやすくなるかもしれない。地方の奪い合いとは言ったが、名古屋にしても大阪にしても東京にしても人がいすぎると思っている。そんなに人がいる必要があるのかということを見ると分散はありえる。どこでも金を稼げる会社はあるんですよ。その会社の人たちに、名古屋にいるよりもこっちにいるほうがよい、と思わせることができればよいということ。ただ先入観もある。都会は便利だからなど。本気でやるのであれば、それを一つ一つ覆しに行く。都会にいるメリットというのは突き詰めていくとそんなにあるわけではない。あるとすれば、生まれたところだとか。ここには大企業は逆に困ると思う。この町にとって適正な、望ましい企業がよい。例えば、森林のからみで、企業城下町をつくれればよい。そうしたら、この会社とこの会社がくっついて集合体を作れば、この製品は大台町を土台として世界へ行けるよね、とか。これがドイツモデルとか、ヨーロッパモデルと言われるもの。そういったことがこの町でできるようになれば雇用も生まれるだろうし、外からは専門の人もはいつてくる。それを見て子ども達は、その会社で働くことを一つの目標とするとか。大台町に戻ってきたときにはこういうことをするのだな、と言って出て行くようになるかもしれない。小野さんのお話は、そういったことを役場の人たちに気づいてもらうことに対してヒントになるのではないか。

森山委員代理（浅沼昂学園教頭）

前回校長から、幼稚園・小学校・中学校がそろっているという教育環境が整っているというのが町の魅力ではないかという話をしたということですが、たしかにそうだと思う。今宮川村にあるが、保育園、小学校、中学校、高校とあり、病院やスーパーまでであるということで、今わたしは松阪に住んでいるが、そこよりもはるかに便利に思う。ただ、さきほどの話にもあったように、子ども達が言うが「小さい頃からいつも同じメンバーですごしてきた」と。ずっと一緒ということは、力関係もずっと一緒。中には外に行きたかったけど、お金がかかるから無理と言われた、という子どももいる。クラス替えがないという

ことは親としては不安要素ではないかと思う。小学校でひとたび人間関係を崩してしまうと、その人間関係が子ども同士、さらには親同士、地域が小さければ小さいほど、そのコミュニティにも影響が出てしまうということで、人間関係がうまくいっている間はいいのだが、ひとつ崩れてしまうと逆に住みづらい場所になってしまうのではないかと思う。もし自分の子どもをここで育てようということになるとちょっとためらうことではある。小学生までは育てやすいけど中学生以降はどうかなあというのは、わたしも学校の魅力化を図っていかないとと思っております。話は変わるが、今はわたしは松阪市内でもはずれのほうに住んでいる。非常に人気のある団地なのだが、駅からは遠くて歩いて45分から一時間、バス停もない、非常に不便なところではあるが人気の団地である。なぜかというところこの小学校がいい。先生たちが非常に熱心で、補習もしっかりして、学童保育も充実している。不便というのはわかっていたが、今は上が大学生、下が高校生になりましたが、今になっても「ああ、あそこの小学校中学校に行かせてよかったな」と思っている。教育というのは母親にとっては重要な条件になるのではないか。関連して、通勤時間が増えるということは家族で過ごす時間が減るということですし、通学に時間がかかるということは、勉強時間も減るし、交通のつながりをよくすることは大事なことはないか。今どうかというと、昴学園はICからはすぐで、車に乗る人間にとっては便利ではあるが、では高校生にとってはどうかというと、今年バスの時間を変えて貰って、つながった。去年まではつながってなかったので、三瀬谷で降りて、下手したら2時間待ち、そのあと三重県内を動こうと思うと1時間待ち、同じことが観光客にも言える。交通の便をよくする、つながりをよくすることは喫緊の課題ではないか。

西村座長

クラス替えがないというはしんどいですね。

森山委員代理（浅沼昴学園教頭）

娘の学校に大台町から引っ越してきた人がいて、松阪でもそういうことを聞くので……。

西村座長

単に学校とかよい先生だけではなくて、なにか仕組みができないか。町内の4つの小学校を一つにするのは難しいかもしれないが、4つの小学校でクラス替えはできないか。バスだけしっかり整備してシャッフルするとか。勝手なアイデアだけど、やろうと思えば解決もできる。住み続けられる町にするためにはそういうことを正面から見ることだと思う。解決策を今すぐというのは無理だけれども、重要な要素として長期展望を達成するためには必要となってくるし、この5カ年にはなにか施策を打たないと、となりますよね。あとは、車を持たない人への交通手段、これは人間が年齢があがっていけばおこることですし、子ども達にとっては問題となる。車をまったく考えない交通手段ということも一つのテー

マになるかもしれない。今すぐとけるとけないではない。ただしとかなければいけない課題として、車を持たない人にとってもまったく支障の無いまち、とか。また、子ども達を閉鎖的な社会だけで育てない、少し自由度のある心の余裕ができる教育できるまち、ということが今のご指摘の中から拾い出せるのではないか。

大松委員

住みやすい町は、女性が住みやすい町をつくっていただけるのが一番と思う。

産業について、自分の仕事のことだが、福島県浪江町に週に一回通っている。津波で全部なくなってがらがらぼんされたまちで、人に戻ってこいといっても戻ってこない、なぜかというところがないから。わたしは浪江町で小さな会社を作ったのですが、働く場ができるので何人かが集まってくる。それで町ができてくるので、浪江町の行政も、行政も避難していたのですが、昔の役場庁舎を動かせるようにしてくれた。やはり産業がないと、人が住めないんだな、ということがあそこでは直接的にわかる。いくら人があふれていても産業がなければ、人がいる必要もないので……。そうすると、大台町ももう一度原点回帰をするべきで、前回は申し上げましたが、大台町商工会の青年部のメンバーは、みな2代目になっているが自分の本当の仕事とはなにか、ということに対して不安もっている。大台町の中での資源というと、農業、林業、水産業となる。この部分を、この5年間で、今動いている事業を追いかけてくるようなかたちの新しい事業をつくらないと、産業がなくなっていくと、人がどんどん離れていくと思う。

住みやすい町については、ぼくはこの43年間大台町から住所を移したことがない。でも、今は週に一回福島にも行きますし、海外も1ヶ月に2~3カ所ですすけど、最後は大台町に戻ってきたいというのがあって、みなさん通勤が大変とおっしゃられますが、僕から言わせると、車に乗って伊勢中川まで行くと、2~4時間以内で日本全国に行ける。北海道でも日帰りで帰ってこれる。海外に行くのでも、セントレアまで出ればそんなに遠いわけではない。特に苦も無く外には出ることができるようになっている。IターンUターンといっても人に来てくれ来てくれといってもなかなか来てくれない。東京や海外でもすぐに帰ってこれるなど、仕事まですぐに大台町といかなくても、仕事は外で住むのは大台町で、ということもあるのではないか。また産業は誘致するのはなかなか難しいのではないか。もちろん農林水産業に関する誘致はあり得ると思うが、多気町のようにシャープが来て、などは、別にうらやましいと思ったこともないですし、地元の産業が新しいビジネスに変わっていかないといけないのではないか。

西村座長

シャープの産業誘致は地元にはメリットがない。でも、この地域を引っ張っていくような中堅企業や小企業、仲間になるような企業はひっぱがしてもいいのではと思う。実際三重県にもいくつか来ている。大台町という最大の特徴を出したときに、ここが一番だという

企業があるはず。そのことをPRしていない可能性がある。ここにくるとライフスタイルも変えられる。実は南伊勢から2年間くらい三重大学へ通っていました。あまり不自由なく通えたのと、そこから東京や北海道や海外も出張していた。さすがに南伊勢だと東京より便利ですとはいえないけれども、津にいと少なくとも関東圏で会社に勤めているよりも確実に楽に出張ができます。メインの駅に行くのが楽ですから。羽田や東京駅の近くにいる人なんていませんから。出張に行くのなら、東京圏よりも地方のほうが楽です。今、それをひとつ整理してもいいかもしれません。大台町で会社を経営するとか、専門職として生きるとか、であればなにができるか、どういうライフスタイルがくめるか、というのは、実はここに住んでいる人たちが理解していないのと、PRをしていない。大台町が住みやすい町、実は働きやすいまちというのは、あまりPRをしていない。大台町が働きやすいというのは、すべての人にとって働きやすいのではなくてもよい。日本中の人をここへ呼ぶ必要はないですね。1万人に1人が大台町を見てくれて、その人が鍵になるような人であれば当たりなんですよ。

大松委員

大台町の生ゴミの収集に関しては、他の市町に比べて分別がしっかりできているので、バイオガスプラントにとってはよくて、鹿児島島の優良企業が大台町に来たいとか。大台町には工業団地はない、といっても、先方は工業団地などいらぬ、ないほうが地域地域にあったプラントがつくれるということで。廃熱利用の中で、エビの養殖とかについても大台町がいいのではというオファーが向こうからある。中小企業の中には大台町に来たいというところもあるのではないかと。

西村座長

町として、なんでもかんでも呼んでくるというわけにもいかないのと、方向性がでてくるといいかなと思う。

実は、今の時代だからこそお金に換えられる財産がいっぱいある。水があるし、森林があるし、別の地域でやっていることを紹介すると風力がある。洋上風力で町に必要な分の5倍くらい生産できるところもある。やはり大台町とはなんぞや、ということに住んでいる人たちが理解をして、ここにある財産をどう産業へ結びつけるのか。雇用は人が住むために絶対に必要であり、それができれば、前の委員のみなさんがおっしゃられてた課題も一緒に解決できる可能性がある。

山茸委員

雇用と定住のとりくみにおいて、求職者数は91名が探しており、42名が男性、49名が女性、20歳代が12名、30代が8名、40代が16名、50代が21名、60代が32名、70代が2名。50代60代が意欲が高い。ハローワーク松阪管内では、求人が4258名あるが大台

町ではフルタイムが 42 名、パートが 64 名。林業では 1 事業所で 2 名、40 代以下。求職者のうち林業希望が 3 名で男 40 代であった。高齢者が増えている、介護の仕事が人手不足である。介護の仕事はけっこう女性が活躍・期待されている仕事である。おばあちゃんでも男性の介護士には抵抗がある人も多い。地元の女性が働いてくれると親しみもあるだろう。町では介護施設が新しくできても、働いてくれる人がいなくて九州から働きに来ている人もいるそうで。

求職が 3651 名で 1.17 倍となっている。ただ、介護や飲食業などのサービス業があるが、求職者が少ないので、マッチングしていない現状はある。

西村座長

50 代 60 代が働くことの背景は？お金か？やりがいか？

山草委員

50 代は家族やローンなどもあるだろう。60 代では年金が 65 才だからもあるが、60 才を期に別の仕事をしてみたいとか、短い時間のパートでいいとかがある。若い方々よりも就労意欲が高いと感じる。

西村座長

働き方に固定概念があるのではないかと思っている。もっと短い時間だけ働くのもいい、と思っている人もいるかもしれない。働くスペックがあわないとも思っている。大学病院ではチーム制ができないかと検討している。3 名でチームを組んで 1 名分の仕事をするとか。求人は 1 人だけでそれを 2 人でやります、などフレキシブルにできないか。ライフスタイルということは働き方も含めて 2060 年までに考えられないか。介護でも主婦の方々が 10 名くらいでチームをつくって交代ですとか。そういった自由度があるとよい。ミスマッチというのがライフスタイルの考え方、労働の考え方のミスマッチがあるような気がする。当の企業や働いている人に言っても解決しないかもしれない。一歩下がって、一つの会社にずっといくのではなく、兼業にしてもいいし、など。国でできなければワークシェアなどもできるように考えてあげるなど。次回あたりには、女性の皆さんはこういうことであれば働けるよね、などが出てくれば。

では、中条さんお願いします。

中条委員

いたずらに人を集めることだけがよいのか、という問題はある。若い人が定住するというのは活力という点ではよいかもしれない。ターゲットを絞ることが大事ではないか。総花的、誰にとっても魅力がある、というのはなかなか難しいと思う。そういうことからするとターゲットを絞って、どういう世代に向けて発信をしていくのか、というのが非常に

大事なのかなと思う。将来を見据えればやはり若い方々に焦点をあてて呼ぶ。

地域資源を活かす、地域の企業同士で新しいものをコラボで作っていくなどの工夫も必要であるし、また、新しいものの提案についても、ちゃんと発信をしてきたのか、ということが疑問になると思う。ニッチでも特色のあることに絞り込んで発信をして、どっかでひっかけてもらうという発信力も大事。

外国人も多く来ている。定番の観光地が一巡すると、2回目3回目では田舎の田園風景が見たい、というツアーがあるそうだ。こういうことは発想の転換ということで大事ではないか。我々側で勝手に線を引いてしまって、なんにもないよね、どこみてもらうの、と自分たちで線を引いていないかなと思う。われわれにとっては日常風景でも目が変われば興味深いものになるかもしれない。固定観念を一度崩して冷静に大台町にはなにがあるのか、という棚卸しをし活用することも必要ではないか。

西村座長

人を呼ぶのでもなんでもかんでもでなく絞って、また住んでいる人が気づかないというのは日本中でおこっていることで、掘り下げるのもかなりマニアックにしてみるのがよいのではないか。田園風景であれば日本中でも田園風景なので、そこでの差別化になってしまう。じゃあ京都となにが違うのか、となってしまう。もっと掘り下げたときに世界で一番のものはないかがいいかもしれない。水は日本で一番、世界で一番というものがあれば、住民の誇りにもなり、住民の表情も変わってくるので。ヨーロッパの町に行くとかならず言うのは、「うちのまちが一番だ」と必ずいう。みんなそう思っているからそこに住み続けている。自分たちが信じ込むことが重要。世界中をまわっていて、ここの風景は圧倒的に勝てるものがあるんですよ。少なくとも、高速道路を走っていてあんな渓谷が見えるところなんてないですね。でも大台町にはある。なにかで「わたしたちはこれで一番だ」と勝手に思い込むのもいいかもしれない。中途半端な田舎に来てくださいではだめ。誰でもきてくださいではだめ。極端に言うと例えば、「今年は2名しか受けられません」とかでもいいかもしれない。産業でいえば、昔のようになにやっても儲かる時代ではないので、本当に儲かる工夫をしないと儲からない。そのためには大台町とはなんぞや、を自分たちが知って、それが世界に通じるんだとい確信がないと、どうどうと産業づくりもできない。産業側の方々には、こういう視点で見るとよいので、そこへ支援をしてほしい、というような指摘をしてほしい。また、誘致については、会社丸抱えで誘致をしてもよいのではないか。税金を安くするだけではなく、家も用意する、友達まで用意する、くらいの感覚。それくらい丸抱えの思い切ったことをやることも大事。海外だったらやりますよ。ある人をヘッドハンティングするのであれば、家族すべてを調べ上げて。極論を言いましたが、普通のことをしていただければ、近所の町と人の奪い合いをするだけにしかならない。本気度が必要であるということであれば、大台町とはなにか、ということを書いて、そこから産業を考えていって、産業城下町をつくるのであれば、どの企業を呼んでくるかなど。

では、呉山さんお願いします。

呉山委員

企業側からは、雇用の拡大と安定した仕事内容の追求ということがある。別の視点で大台町の魅力を考えると、観光やスポット、イベントづくりが必要ではないか、と考えた。非現実的なことかもしれないが、10km 続く桜並木とか、中途半端ではない規模の景観を意識したイベントづくりも必要なのかな、と思う。この大自然を見るとそういうこともできるのではないかと思う。それを町ぐるみでみんなで管理する、勢和多気にアグアイグニスさんが来るということもあるので、そこに来るお客さんがちょっと足を伸ばしてあそこへ行こうか、など立ち寄ってもらえるようなスポットが大事なのではないか。それにあわせて B 級グルメのイベントとか、地元でおいしいものを作って出店するとか、地域の強みをいかせて効果も出るのではないか。さらには住民にも誇りがでてくることにつながるのではないか。企業や地元のお店や個人が出店してもいいし、それがうまくいけば町全体に効果がでてくるのではないか。ダム沿いに夜はライトアップをするなど、田舎だけど海外のお客さんも田舎がいいなということは日本人の中にもあると思う。大台町を見たら、自然、山、川、水、景色を利用しないわけにはいかないと思う。

西村座長

自分たちの町を磨き上げる、ということは重要。落ち着いた町や最終的に残っている町というのは、「〇〇の町」という別の形容詞がつく。例えばニースであればやはり海なんです。この町ならこれ、大台町なら〇〇、ということ磨き上げていくと、ひとつの誇りになっていくと思う。圧倒的なものを物理的につくるのは別にしても。別の話ですが、津市でやっているのは、20 数 ha の花畑を作ろうとしている。その中心に直売所を作ろうとしていて、一年半かけてつくるんです。今まで田んぼだらけだったところが、季節毎にパレットのようになる。その真ん中で直売所をして、その裏には里山を管理して歩いて歩けるとする。そこまでいくかどうかは別にしても、あそこに行けばあれがある、ということが明確になると、非常にわかりやすいので印象に残る。あそこに行けばあれがある、ということが明確になると、非常にわかりやすいので印象に残る。なぜ町が残らなければいけないかと考えるときに、一つの求心力のようなものが生まれてくる。なにか心の拠り所のようなものを大台町につくっていくということがいいのかもしれない。

だいたい皆さんからお聞きしましたが、言い足りないことはありませんか？

野田委員

今観光協会にいる。大台町に来たばかりのときは喫茶店で働いていて、役場の人に観光協会に仕事があるんだけどという話をもらったのだが、自分は随分迷っていたのだが、そ

の人が「大台町は自然がいいし、もう一つは人なんです」と言っていた。役場の人が、“人がいい”と自信を持って言うところもめずらしいのではと思って、やるようになった。

観光協会で仕事をしていて思うのは、実践者としての人づくりが足りないのかなと思う。自分でも妄想して、あれがしたいこれがしたいと思うのだが、じゃあ誰がやるの、となる。例えば昴学園となにかしたいと思っても、昴としてもいろいろやりたいことがあって、ではそこをつなげるのは誰がやるのかとなる。実践する人、つなげる人も考えてもらえるとうい。

西村座長

実は今、昴学園に手を入れようと思っている。この森林を活かす、水を活かすというところで働く専門人材はここでしか育てられないでしょう。そこにある高校に中心になってやっていただくのがよいのではないかと考えている。すぐそのことを変えるのではなくて、大台町から働きかけていって、県立高校なんだけれども動かしていったいいのではないかと。ここにある高校でここで働く人を育てることができればすごくいいと思う。小中高、できれば大まで含めて教育が受けられるという環境があれば、大学を誘致することが難しければ、ここをフィールドとして使えるようにするなど、三重大と組むなど、子ども達は大学を通じて世界を知ることできるし、ここで全部育てられるかもしれない。そうすると、観光で売るんだとなれば、その中核人材を育てるような場がないことは問題になるかもしれない。2060年といわず、この5カ年計画の中に、ここで生き抜くプロフェッショナルをつくる、大台町を最大限活かせるプロフェッショナルをつくるくらいのことがあってもいいのではないか。それに向かつての施策としては、昴学園を町がどのように支援していくのか、こういう教育コンテンツをつくっていく、場合によってはコースをつくる、学校全体をそういうふうに変えていく、場合によっては三重大を誘致してくる、三重大を誘致できなければ、昴学園に専科をつくって森林や観光を学ぶための専攻科をつくり短大卒の資格を与えて、そのあとは三重大に編入させて本物の専門家をつくるなども考えられる。

みなさんいかがですか？まあ、まだもう1回会議はあるし、また気がつけば役場へご連絡いただければと思います。それでは、これで戻します。今のみなさんのご意見をうけて、ワーキング部会でもんでいただいて、地方創生の中の施策について出していただければと思います。

5 事務連絡

事務局

この貴重な意見を受けて、改めて推進本部にて検討、また6月中旬以降には町内6地区での住民との懇談会を開催する予定です。第3回地方創生会議は、職員によるワーキング

部会での事業等の検討がすんだところで、8月末頃から9月上旬に開催予定です。

副町長

ワーキングでつくった施策への会議はしてもらえるのか。役場の職員もこれまでいろいろしてきたがうまく動かない。理想と現実のギャップが必ず出てくる。それをどういうふうにしていくかが一番大事になる。今からは、役場の職員が集まってあーだこーだとやるわけで、施策らしいものができてくることはできてくるのだが、実際これを動かしていくといろんなところでギャップができてきて動かないとなるだろう。みなさんからのご意見を聞きながら、本当に動く施策をつくりたい。これまでも総合計画もつくっているが、お金だけが動いている。実際はどうかというといまいちで、焦りみたいなものもある。ここが違うのではないか、という本音の話をしていただかないと動かない。それをなんとかお願いしたい。できれば、もうちょっと会議を開かして欲しい。役場の職員が練ってきた戦略について、こんなものじゃ動かんよ、ということを議論してほしい。最後にみなさんの意見を聞いた、では遅いので、よろしく申し上げます。